鹿児島女子短期大学紀要
第30号（1995）117～128頁

The Scarlet Letter における Chillingworth の両義性

――「悪魔」と「神の使者」――

高　島　まり子

序

The Scarlet Letter において Chillingworth は，“the sanctity of a human heart”[(1)]を犯す邪悪な復讐をひそかに遂行することによって「悪魔」と化す悪漢役である。作者 Hawthorne の最も嫌悪する“the Unpardonable Sin”[(2)]を犯した彼については，憎むべき罪人という設定にほとんど疑問の余地は無いように思われる。しかしながら，そうとばかりも言い切れない部分が原作に散見されるのも事実である。例えば彼の死後，作者は“It is a curious subject of observation and inquiry, whether hatred and love be not the same thing at bottom.... Philosophically considered, therefore, the two passions seem essentially the same,...”（260）と述べ，愛と憎しみの中に相手に対する同様な“a high degree of intimacy and heart-knowledge”（260）を見出し，二つの相反する感情の根底に共通点があることを暗示している。そして“In the spiritual world, the old physician and the minister－mutual victims as they have been－may, unawares, have found their earthly stock of hatred and antipathy transmuted into golden love.”（260-1）と死後の世界における両者の和解を暗示し，Chillingworth に一種の救済の余地を残している。“May God forgive thee!”（256）という Dimmesdale の Chillingworth への言葉はそれを裏付けているとも受け取れる。Leslie A. Fiedler はこれに関して，作者が最終的に Dimmesdale と Chillingworth の関係には好意的で「憎悪は単に愛の変装した形であって善を生むかも知れぬという逆説」[(3)]を表明していると述べている。また Chillingworth は遺言によって遺産を Dimmesdale と Hester の娘 Pearl に譲り，その結果彼女は ボストンのピューリタン共同体（以後，「共同体」と表記する）において最も金持ちの女相続人となったという。その事実が，彼女が後にヨーロッパに渡り幸福で裕福な結婚生活を楽しんだらしいことに貢献したとすれば，これも作者の Chillingworth への好意的な見方を示唆すると言えよう。更にプロットに深く関わる部分では，Dimmesdale が告白の場面で，胸の「A」の文字を「常に赤熱にしておくために」（“...to keep the torture always at red-heat!” 256）神が Chillingworth を自分のもとへ送ってくれたと述べ，それを神の慈悲と受けとめて感謝していることも，逆説的ではあるが彼の肯定的な役割を暗示すると見做されよう。「筋の上から見れば，確かに Chillingworth は牧師を告白と償いに向かわせ」た[(4)]と述べるフィードラーの言葉も，肯定的な彼の役割に曖昧ながら言及したものと思われる。以上の点を考慮しながら，Chillingworth の役割を再考してみたい。

I

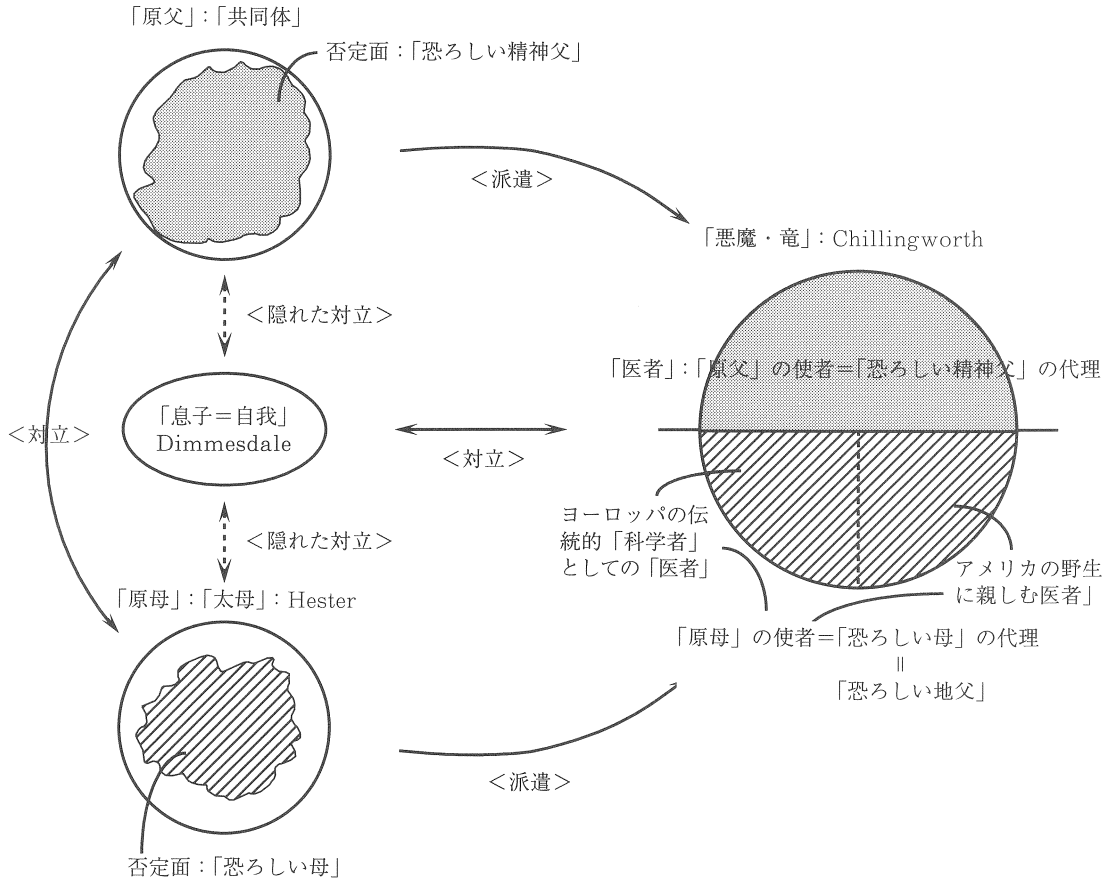
既に前稿[5]において，C. G. Jung の高弟である Erich Neumann の学説を援用して，この作品を「自我＝Dimmesdale」の成長の元型的プロセスを描く一種の「英雄神話」と解釈し，その視点から Chillingworth の人物像を分析したが，それを幾分加筆，訂正するところから論を進めたい。前稿で論じたように，原作のプロットの出発点は，「自我＝Dimmesdale」が姦通によって「原両親の分離」を為し遂げた時点と位置づけられる。即ち彼が自らを無意識の支配圏から切り離すことによって，その混沌とした世界を「原父＝共同体」と「原母＝Hester」とに解体し，その真ん中に立って両者の強大な引力に抵抗している状況から物語は始まる。前稿では，その状況のなかで Chillingworth は最初「原父＝共同体」の一部として登場するが，最終的には「共同体」とは全く異なる「悪魔」的な存在へと変貌していく，と捉えた。そして彼の「悪魔」性はコキュとしての嫉妬による復讐心から生まれたというより，むしろ古いヨーロッパの伝統的な「科学者」としての彼にもともと内在していた否定面――科学力を武器に天なる神に対抗して地上での父権を主張する神への反逆心――が露顕し発展したもので，彼はエデンとしてのアメリカを破壊するために乗り込んで来た地獄的ヨーロッパの知性を象徴する「科学者」であり，姦通を経て「原両親の分離」[6]を為し遂げた「息子＝自我＝Dimmesdale」の自立を阻止し，彼の肉体と精神を神に代わって支配せんとする「恐ろしい精神父」[7]であると位置づけたのである。本稿ではこの「科学者」としての Chillingworth にもともと内在する「悪魔」性の根拠として，処刑台上の Hester が思い出す彼の眼が人の魂を読み取ろうと “a strange, penetrating power”（58）を発揮したのも，また「共同体」の一員がオーヴァベリー事件の悪役であるフォアマン博士と一緒にいる彼を見掛けたのも，彼の渡米以前であることを付け加えておこう。同時に前稿では，彼が「科学者＝恐ろしい精神父」であると共に，いくつかの根拠（アメリカの野生の自然との密接な結び付き，彼自身と Hester の肉体的アンバランスの認識と激しい復讐心との矛盾，そして溺死のイメージから推測される海神ポセイドンとの関係や彼がよく動物にたとえられること等）から，否定的な「太母」Hester の使者として「息子＝愛人」Dimmesdale への復讐を代行する「恐ろしい地父」[8]でもあると論じた。しかし，上記の否定的な「科学者」のイメージが，天なる神への敵意と地上的な父権の主張において，地に君臨する「太母」の従者たる「地父」の像に限りなく近づくところから，Chillingworth は「精神父」と「地父」を兼ねているのではなく，彼の「悪魔」性の本質は「恐ろしい地父」に集約される，と訂正しておきたい。更に彼の「地父」性を裏付ける根拠として，Hester との共犯関係の暗示が挙げられる。彼は妻の愛人を “the man... who has wronged us both”（75）と呼び，復讐のために自分の正体を共通の秘密とするよう彼女に約束させる。このことは，彼にとって復讐が自分ばかりでなく，彼女のためでもあることを物語っている。その意味は妻を堕落させて捨てた卑怯な愛人への復讐であるが，Dimmesdale を「太母」から逃亡した「息子＝愛人」と捉えれば，「太母」の報復の代行ともとれるのである。実際，彼女が秘密を守らなければ復讐が不可能になったであろうことを考え合わせると，彼女の意図とは無関係にせよ，二人の共犯関係は明らかであろう。

さて前稿では，姦通を経て「原両親の分離」を為し遂げた「自我＝Dimmesdale」は「原父」，「原母」の支配力に圧倒されてなかなか「竜との戦い」[9]に進めず，森での Hester との再会に始まる「太陽神話」[10]

の「夜の旅」(「太陽神話」の下半分) によってやっと「父竜」と「母竜」との対決を決行するに至ったと捉えた。しかし，それ以前に Chillingworth の「悪魔」イメージの発展が描かれると共に，彼と Dimmesdale の葛藤が「共同体」の大衆の間で「悪魔自身か悪魔の使者」"Satan himself, or Satan's emissary" (128) と牧師との激しい「闘争」と見做されたことを考慮すれば，両者の葛藤の意味を再考する必要があろう。「共同体」は「医者」Chillingworth に Dimmesdale の世話を依頼したのだが，結果的には「原父」が彼を「息子」のもとに派遣し，両者を戦いへと導いたことになる。支配者や父王が「息子」を怪物退治に送り出すというパターン (この場合は逆に「息子」のもとに Chillingworth を送り込んだのだが) は，「息子」の勝利が「父殺し」に繋がることになる「竜との戦い」として「英雄神話」によく見られるもので，ノイマンはモーセとヘラクレスを例に挙げている。[11] むろん母への求婚者によってゴルゴ退治に派遣されたペルセウスも，その代表として含めることができよう。Chillingworth の本質を「原母」(「太母」Hester) の代理である「恐ろしい地父」と規定したのに基づいて，既に Dimmesdale にとって「母竜」との「竜との戦い」が始まっていると考えられる。ところで神話においても怪物はウロボロス的な「太母」を象徴するのであるが，Chillingworth の役割は「太母」Hester の代理だけではないのではなかろうか。彼は Dimmesdale に告白を迫るようなことを言って罪悪感を刺激しては——"Wouldst thou have me to believe,... that a false show can be better... than God's own truth? Trust me, such men deceive themselves!" (133)——また逆方向に働き掛けて——(処刑台で告白の真似をしている彼に対して) "Come with me, I beseech you, Reverend Sir; else you will be poorly able to do Sabbath duty to-morrow." (157)——告白を阻止しようとする。これは「復讐者」としての彼による Dimmesdale への魂の拷問であるのは当然であるが，それに加えて前稿では自我を相反する両極に引き裂くこの言葉は，自我エネルギーの浪費によって「太母」に反抗する自我を摩滅させることを企む「地父」の策略から出たものと解釈した。しかし，そうとばかりは言えないのである。前半の言葉は「共同体」の立場に立てば，「原両親の分離」を果たし，「原父」の罪と罰の定義から一歩踏み出した Dimmesdale が更に人間性の理解を含む新たな価値観を創造することを阻止するための威嚇となり得る。「共同体」は，「医者」Chillingworth を通して Dimmesdale の罪とその隠蔽を激しく非難し，「原両親の分離」によって「原父」と「原母」の間に宙吊りになった彼のアイデンティティーの摸索を糾弾する。しかしながら，そのような彼のマイナスの自己像を補償するためにどこまでも告白を迫るかというとそうではなく，逆に後半の言葉によって「原父」の優秀な後継者という仮面を押しつけようとする。秘密の罪に苦悩したために獲得した雄弁によって，Dimmesdale が以前にも増して「共同体」の熱狂的な崇拝を一身に集めていることを背景に考えれば，随所に見られるこのような Chillingworth のへりくだった言葉が，「共同体」の Dimmesdale への崇拝と期待を代弁する結果になっているのは明らかであろう。信者達の熱狂的な崇拝が彼の告白をますます困難にし，彼のアイデンティティーの探求を一層迷路に誘いこむ効果を持つことは，原作に描かれている通りである。こうして Chillingworth は，「古い法の破壊者」[12] として誕生したばかりの Dimmesdale を「原父」の支配圏に引き戻そうとする使者の役割をも果たすのである。即ち「医者」としての彼が，人間性を抑圧する古い宗教や道徳，社会のシステム等への絶対服従を強要する「恐ろしい精神父」という否定面を顕わしてきた「原父＝共同体」とは，性質も目的も異なる「地父」であることは既に述べた通りだが，にも拘わらず結果的には彼は「原

母」ばかりでなく「原父」の使者をも兼ねることとなる。換言すれば，彼の「悪魔」性の本質は「原母」と「原父」の双方からの使者たる役割にあることになる。それゆえ彼との戦いは，「父竜」と「母竜」に対する二重の意味での「竜との戦い」となるのである。しかしながら自らも“Who is he? Who is he?... I have a nameless horror of the man.”（156）と言う如く，Dimmesdale は激しい恐怖に苦しみながらも「医者」の正体も彼の意図も知らないため，敵を敵と認識できず，「竜との戦い」が既に始まっているにも拘わらず戦うことは不可能なのである。以上，前稿の訂正も含めて「悪魔」としての Chillingworth の否定的な役割を再考し，彼が「原母」と「原父」の各々から「息子」である「自我＝Dimmesdale」のもとに送り込まれた使者であることを論じた。従って彼は，謂わば「原両親」あるいは始源の無意識を象徴する原竜「ウロボロス」の支配力を一身に体現している「竜」であるとも言えよう。以上のような Chillingworth の像を図示すると下記の図〔Ａ〕のようになる。

図〔Ａ〕



Ⅱ

次に Chillingworth の肯定面を見ていきたい。前稿では森で Hester と再会し彼女と逃亡の約束をして

帰宅した Dimmesdale が Chillingworth と再会するなり，“with one hand on the Hebrew Scriptures, and the other spread upon his breast”（223）の状態で蒼白になって言葉もなく立ち尽くしてしまう場面で，Dimmesdale が逃亡計画の破棄と告白を決意することによって彼の「母殺し」と「父殺し」が成し遂げられ，「竜との戦い」が彼の勝利に終わったと論じたが，この「夜の中心点」[12] における Chillingworth の役割には再考の余地がある。Dimmesdale が胸に当てた片手が隠された胸の文字「A」を押さえ，過去の罪と逃亡の決意に対する彼の罪悪感を示していることは間違いない。だがそうならば，この場面で Chillingworth が Dimmesdale の内面に喚起した罪悪感が，過去 7 年間にわたる不健全な心理的拷問から一瞬の内に真の悔悟を促す健全な治療へと変化したのはなぜか。前稿では，「ヘブライ語の聖書」に置いた片手が示すピューリタニズムの教えが Dimmesdale を支える力となったことをその原因と考えた。しかし彼が牧師であるばかりでなく，本質的に信仰の人であり，しかも過去 7 年間自分の罪を意識しながら生きてきたことを思えば，長い年月にわたって得られなかった神による強力な支えをこの場面で急に確信するのは唐突過ぎるように思われる。この聖書が神による支えを意味しているのは確かであろうが，それを彼に確信させる何らかのきっかけがあったのではなかろうか。まず彼の罪悪感が果たす役割の変化の現実的な原因として考えられるのは，Dimmesdale が Hester に教えられて「医者」を敵と認識した結果，拷問のメカニズムが停止したことであろう。だが，それだけなら，既に森で告白の決意をしたはずではなかろうか。そうならなかったのは，森では彼が敵の復讐行為を “He has violated, in cold blood, the sanctity of a human heart.”（195）と非難し，“The judgment of God is on me,...It is too mighty for me to struggle with!”（196）と述べるように，抵抗できない神罰と受けとめたからである。ところがこの場面では自分に真の悔悟をもたらすための神の叱責と受け止め，その中に神の慈悲を認めたに違いない。後に告白の場面で，胸の「A」の文字を「常に赤熱にしておくために」（“...to keep the torture always at red-heat!” 256）Chillingworth を送ってくれたことを神の慈悲と感謝している彼の言葉が，それを物語っている。彼はこの場面で，魂の侵略という「医者」の行為に森では気付かなかった新たな意味を見出したのである。この認識の変化が，聖書の上にのせられた片手によって象徴されているのではなかろうか。即ち彼の罪悪感を刺激したのは Chillingworth であるが，彼はその背後に他ならぬ神の存在を見たのである。とすればこの場面の Chillingworth の役割は，神の叱責と慈悲を Dimmesdale に伝える使者とも言えるのではないか。

「神の使者」という役割から連想されるのは，牧師の部屋のダビデとバト・シェバの逸話を織り込んだ壁掛けに描かれた，ダビデの姦通を断罪するため神から遣わされた予言者ナタンである。“the woe-denouncing seer”（126）という記述から，青山義孝氏はこのナタンは神に替わってダビデを叱責する姿であるとし，その時の彼の言葉をもじった “Thou art thyself the man!”（217）を Dimmesdale が森からの帰途，知人から投げ付けられる言葉として作者が仮想していることと，帰宅後の部屋を描写する際に作者が “the tapestried comfort of the walls”（222）と表現したダビデの罪と懺解と赦しを予型として Dimmesdale の罪と懺解と赦しが暗示されているとする二点から，*The Scarlet Letter* とダビデの物語にタイポロジーを見出している。そしてその手法を用いて Dimmesdale の改心が明確に描かれているとして，この作品を「救済の物語」であると主張する。[14] 彼の最終的な変貌を神による救済ととるか自我の完全な独立ととるかはさておき，氏の主張が当を得ているばかりでなく，Chillingworth

こそが予言者ナタンの役割を果たしていると思われる。それは氏の主張するタイポロジーの手法に加えて，壁掛けのある部屋でDimmesdaleとChillingworthが再会すること，前者が片手を聖書に置いたこと，彼が告白の場面で神が後者を派遣したのでありそれが神の慈悲であると断言したこと，等によって裏付けられるのではなかろうか。

ところで「竜との戦い」に関するノイマンの説明によると，自我の強化に対応して形の無かった集合的無意識が諸元型のイメージ界へと分解し，更に諸元型そのものが分解を経て圧倒的な力を失い，自我によってより理解し，摂取しやすいものへと変化するという。更に彼は述べる。

> この元型の分解過程は神話の中では英雄の仕事として表わされる。世界両親の分離が彼によって成し遂げられ，それによって初めて意識の誕生と自己誕生が生じる。‥‥「竜との戦い」はまずウロボロスという原元型に向けられた。これが分解すると戦いは母と父に対してなされなければならず，戦いの終わりには分解が徹底的に進んで，対立が生ずるような布置が生まれた。英雄に対立するのは恐ろしい母と恐ろしい父であり，味方するのは授精する神－父と受精－出産する女神－処女である。――（中略）――
>
> こうしてたとえば太母イメージから良き母が分離し，意識に認知されて一つの価値として意識世界に取り入れられる。もう一つの側面である恐ろしい母は，我々の文化圏においては抑圧され，意識世界から遠くへ排除されている。[15]（下線筆者）

即ち神話における「竜との戦い」とは，「原母」については，自我がこれを肯定面と否定面とに分離し，前者を統合し後者を克服する心理的プロセスであり，「原父」についても同様であると言えよう。

Dimmesdaleによる「原母」の肯定面の認識は，まず冒頭の処刑台の場面で姦通の相手の名を告白することを断固として拒絶したHesterに“Wondrous strength and generosity of a woman's heart!”（68）と感嘆したことや，Pearlの養育権をめぐって「共同体」の支配者達に対してHesterを弁護し母子の別れを阻止したこと，夜の処刑台で彼女にChillingworthへの恐怖感を訴えて救いを求めたこと等に見られ，この認識が徐々に深まり，両義的な「原母」像から肯定面が分離されるプロセスが進行中であることが解る。むろんこのプロセスは，13章‘Another View of Hester’に‘She was self-ordained a Sister of Mercy;…’（161）と要約されている彼女の隣人愛と献身的な奉仕活動，そしてそれによって緋文字の意味が‘Able’と解釈されるまでに「共同体」の彼女への評価が高まっていったことに対応していると考えて間違いないであろう。その一方で性的妄想（“…the backward rush of sinful thoughts, expelled in vain!” 139）となってDimmesdaleを襲い，彼を「息子＝愛人」への退行に誘う「原母」Hesterの否定面に対する彼の必死の抵抗も，鞭打ち，過度の断食，徹夜等の自虐的な苦行や鏡を見つめながらの徹夜から推測できることは，前稿で考察した。即ち，「原母」の両義的なイメージは徐々に肯定的な像と否定的な像とに分解しつつあるのだ。ところが森での再会の場面で，両者は現実のHesterの捨て身の愛情の吐露において，再び分かち難い一体となって現われる。しかし，逃亡の決意によって森からの帰途Dimmesdaleが様々な悪の衝動に襲われることから，彼の決意が堕落であり，Hesterが彼にとっては否定的な「誘惑者」の役割を果たしたことは明らかである。そして告白の

場面での彼女のイメージの反転――森で「息子」を再び支配下に引き込もうと誘惑した否定的な「原母＝太母」像から「英雄」を産み出す「処女－母」としての肯定的な「原母＝太母」像へ，即ち「誘惑者」から「聖母」への反転――が，最終的に「自我＝Dimmesdale」が「原母」の否定面を殺し，肯定面のみを抽出したことを示しているのである。「英雄」の仕事が元型の分解，更にその否定面の克服と肯定面の統合であるとするノイマンの説がまさに立証されたと言えよう。

これと同様に Chillingworth のイメージも，「自我＝Dimmesdale」の成長と敵の正体の認識に伴なって否定面――「原両親」の使者としての「竜」，あるいは「悪魔」（サタン）――と肯定面――「神の使者」（ナタン）――へと分解し，前者が克服され後者が統合されたと考えられる。このような神意の啓示の認識は，いかにも唐突過ぎるようにも思われるが，Chillingworth の「神の使者」としての肯定的な役割の片鱗は，「復讐者」として，また「原両親」の使者として彼が Dimmesdale の精神を操り支配する行為の中に，最初から含まれていたのではなかろうか。即ち既に述べた Dimmesdale の自我を相反する両極に引き裂こうとする Chillingworth の発言の内の，告白を勧告するような言葉である。その前に Dimmesdale との会話の中で，秘密の罪を隠し持つ人々のことを彼は次のように非難する。

> "These men deceive themselves,...They fear to take up the shame that rightfully belongs to them. Their love for man, their zeal for God's service,－these holy impulses may or may not coexist in their hearts with the evil inmates to which their guilt has unbarred the door, and which must needs propagate a hellish breed within them. But, if they seek to glorify God, let them not lift heavenward their unclean hands! If they would serve their fellow-men, let them do it by making manifest the power and reality of conscience, in constraining them to penitential self-abasement! ..." (133)

これはまさに正統的なピューリタンの見解であって，「竜」であり「悪魔」である Chillingworth の中に「神の使者」としての要素の下地が最初からあったことを物語っているのではなかろうか。14章で "My old faith, long forgotten,..." (174) と Hester に向かって彼が言及する信仰がこのような見解の源であろう。更に彼の肯定面について，元型的な裏付けを試みてみたい。

Ⅲ

既に考察したように，彼の否定面は「原両親」の使者である「竜」であり，彼との戦いは「竜との戦い」と考えられる。ところで「ヘビ」あるいは「竜」の元型に関して，ノイマンの師ユングは『分析心理学』の中で興味深いことを述べている。[16]「洞窟のヘビ」という古代によく出てくるイメージが登場する神話的な夢の解釈に関連して，彼はヘビが「恐怖を引き起こしたり，危険を表わす動物であるだけではなく，病気の治癒をも意味している」ため医師の神アスクレーピオスと関係があり，彼の紋章に使われていると述べる。更にヘビは医師の神そのものと見做されたと共に，古代の病院であったアスクレーピオスの神殿では会計係りや進物の収集係りでもあったという。またヘビは「知恵と予言の特性」を兼

ね備えており，その例として神託で有名なデルフィに住んでいた大ヘビ，ピュートーンが挙げられている。そしてヘビと水は密接な結び付きを持つと共に，伝説の中でヘビは竜に置き換えられていることが多いという。キリスト教徒の洗礼が象徴的な溺死の後，新たな人格への再生をもたらす機能を持つことから，水が恐怖や死と同時に再生に深い関係を持つことも語られている。

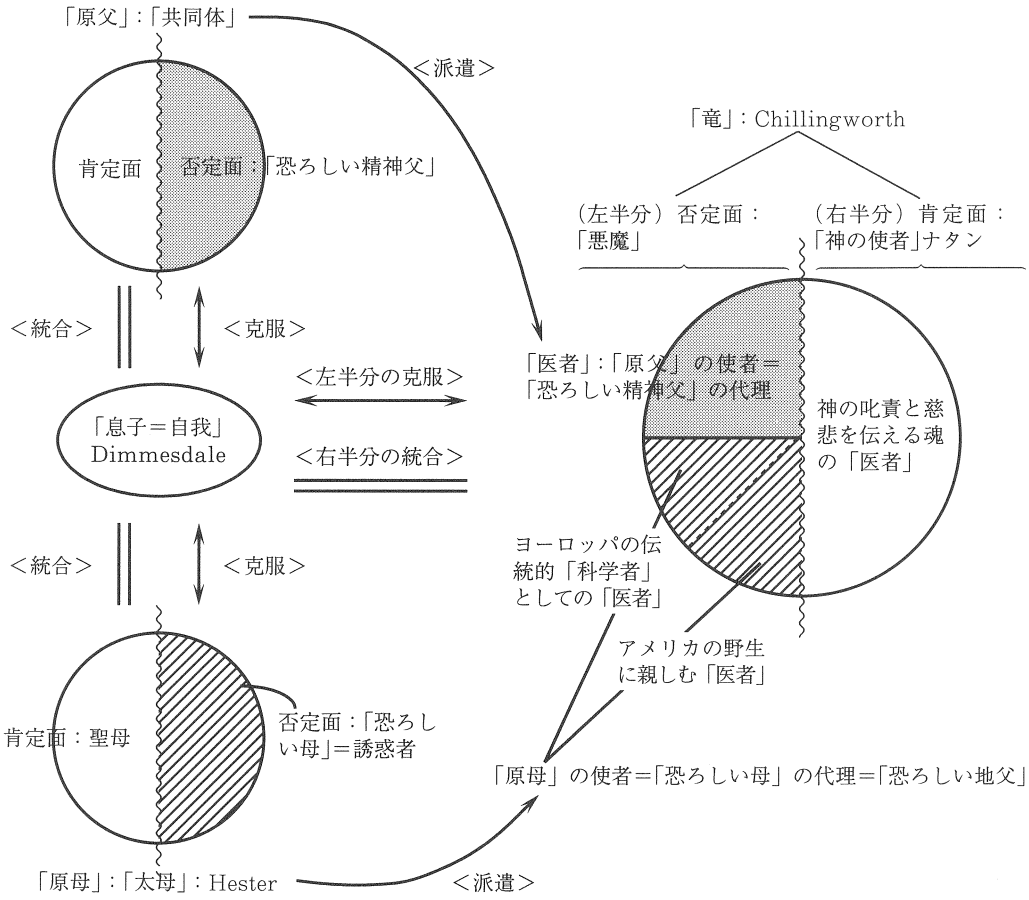
以上の「ヘビ」,「竜」,「医者」,「金品や富との関わり」,「知恵と予言」「水との結び付き」「再生」等の要素は，Chillingworthに驚くほどよく当てはまるのである。彼が最初に登場した時，処刑台上のHesterを見た彼の顔に浮かんだ苦悶の表情は“A writhing horror twisted itself across his features, like a snake gliding swiftly over them,...”(61)と「ヘビ」にたとえられている。また彼は伝統的なヨーロッパの医学とアメリカの野生の植物やインディアンの医術を併用する優秀な「医者」として「共同体」で活躍し，Dimmesdaleの顧問医師となって彼の治療にも当たった。彼自身の言葉によれば，彼の看病が無ければDimmesdaleは罪悪感による苦悩のために罪を犯して二年以内に死んでしまっただろうという。“...the richest fee that ever physician earned from monarch could not have bought such care as I have wasted on this miserable priest!...That he now breathes, and creeps about on earth, is owing all to me!”(171) という彼の言葉は，確かに彼が「医者」としてDimmesdaleの肉体を熱心に治療し，成果を挙げたと自負していることを示している。しかし同時に既に見たように，彼は「悪魔」的な「医者」としてDimmesdaleを精神的な拷問にかけ，“Never did mortal suffer what this man has suffered.”(171) と彼自身が言うほどの苦悩を与えたのである。そして，本稿ではそのような彼の役割を，自我の元型的な発達過程において「自我＝Dimmesdale」が退治しなければならない「竜」と捉えたのである。また「金品や富との関わり」については，もともと彼は黄金を求める錬金術師でもあり，死に際してPearlに莫大な遺産を遺した。「知恵」についても，長年にわたって学問に励み，優れた「学者」として知性の人であったことは明らかである。更に「水との結び付き」と「再生」については，彼が渡米の途中で船の事故に遭い溺死したという噂があったこと，彼自身がその噂の通りになりたいと望んだことなどが連想されるが，前稿ではそれを海神ポセイドンとの関係を想定して彼が「地父」に再生したことの根拠と見做した。このように，ユングの述べる「ヘビ」あるいは「竜」の元型の特質がChillingworthによく当てはまることは，本稿で論じてきた，彼が「竜」元型としての役割を果たしているという私見を裏付ける，と言えるであろう。ならば，「ヘビ」や「竜」の元型に含まれる肯定的な性質もまた，「竜」としての彼に本来内在していたと考えることが可能であろう。とすれば，彼が「悪魔」から「神の使者」へと変貌したのも当然であると考えられるのではなかろうか。そう仮定してユングの肯定的な記述を「竜」としてのChillingworthの役割に読み込んでみると，以下のようになる。

彼の表情が「ヘビ」にたとえられていることは，「太母」の手先である危険な敵対的動物としての彼の役割を暗示していると考えてきたが，最終的な役割の反転を仮定すると，「ヘビ」が恐怖や危険と共に治癒を表わすという記述は彼にあてはまる。同様に「悪魔」的な「医者」も，結局は健全な治療を施す魂の「医者」へ，即ち「神の使者」たる予言者ナタンへと反転してDimmesdaleを魂の治癒へと導き，「ヘビ」の予言の能力を発揮したかのように救済を予言したと考えられる。また彼の「金品や富との関わり」を示す一面である「錬金術師」は偽「科学者」としての暗い側面を持ち，古いヨーロッパの伝統的な学問を修めた否定的な「科学者」――知力を武器に天なる神に対抗して地上での父権を主張す

る神への反逆者――の仲間，即ち「地父」の性質を持つと考えられる。そして「Dimmesdale のような崇高な高みを慕う新しい人間を黒くいびつな敵意に駆られて憎む」[17]という D. H. Lawrence の言葉に見られる如く，「錬金術師」としての彼の地上的な価値の追求は「悪魔」性につながることが暗示される。しかし，それも彼が Pearl に遺した遺産が彼女の幸福な結婚に結び付いたことからも解るように，肯定的要素となり得るのである。同様に彼の「知恵」も，「地父」としての「悪魔」的なものから神の叱責と救済を伝えるナタンの聖なる「知恵」へと反転したと言えよう。そうしてみると「水」と「再生」についても，Chillingworth を「太母」の使者として再生させたと考えられていた海水は，「神の使者」としての再生をも既にひそかにもたらしていたと解釈できないこともないのである。

更にユングは，上記の要素に象徴のレベルで解釈を施す。[18]「深い水」は無意識を表わし，その中にある宝物は「ヘビ」か「竜」によって守られており，宝を獲得するには「竜」を倒さねばならないという。ところが不思議なことに神秘的な宝は「ヘビ」や「竜」と分かち難く結び付いていて，「あたかもヘビそのものが大変な宝物であり，測り知れないほどの力の源泉のようだ」というのである。従って Dimmesdale が「竜との戦い」に勝って自我の最終的な独立を果たすということは，無意識層まで下降してそこに居る「竜」Chillingworth を倒し，彼の守っている「宝」を獲得することとなる。ここでも彼が「原父」と「原母」の各々から「息子」のもとに送り込まれた使者であり，謂わば「原両親＝ウロボロス」（換言すれば無意識）の支配力を一身に体現しているという私見と，「竜」が無意識の化身あるいは守護者であるというユングの話は符合する。しかも戦わねばならない相手であるはずの「竜」そのものが「宝物」であるということは，Dimmesdale が倒さねばならないはずの「竜」である Chillingworth 自身が「夜の旅」の最も深い「夜の中心点」で，即ち無意識層の最深部で「神の使者」ナタンとなって神の叱責と慈悲を伝え，「自我＝Dimmesdale」の最終的な独立をもたらした，という本稿の逆説的な仮説と一致するのである。更に「水」による「再生」を無意識層に退行してそこから新たな力（宝）を汲み上げてくることと解釈すれば，Dimmesdale が無意識の代理としての Chillingworth と対決すると同時に，彼の中に新たな意味（「神の使者」）を読み取ることによって彼から新たな力（宝）を汲み上げて「英雄」的な自我として再生したという私見を裏付ける。フィードラーも「ディムズデイルを神の道に近づけるのは永遠に悪魔的なもの――それは裏切られた夫チリングワースの姿をとっているわけだが――であり，ディムズデイルはこの＜蛇＞に救われて，…」[19]と述べているが，既に考察したように Chillingworth は「永遠に悪魔的なもの」ではなく，また「蛇」も同様である。「ヘビ」あるいは「竜」元型の持つ肯定的な意味を考えれば，「ヘビ」あるいは「竜」である Chillingworth が Dimmesdale を救ったのはごく当然とも言えよう。なぜならもともと「竜」元型に含まれていた肯定面が，「竜」Chillingworth においては，Dimmesdale の成長に伴なって「神の使者」ナタンとして分離，統合されたのであるから。以上，Ⅰにおいて「悪魔」として描かれている Chillingworth の否定的な役割を「息子＝自我」が戦わなければならない「竜」――「原父」と「原母」からの使者――と位置づけ，Ⅱ，Ⅲにおいて元型の分解についてのノイマンの説明とユングによる「ヘビ」あるいは「竜」元型の意味の解釈を援用して，「竜」Chillingworth に重大な肯定面が潜在し，「自我＝Dimmesdale」による「英雄」的な独立の獲得にとってその肯定面が決定的な役割を果たしていることを裏付けた。図〔Ａ〕を訂正して最終的に彼の役割を図示すると，次の図〔Ｂ〕のようになる。

図〔Ｂ〕



注

（1）Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter: The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Vol. I, ed. William Chavat et al.（Ohio State University Press, 1978）, p. 195. 以下，この作品からの引用はこの版により，文中に頁数のみ記す。

（2）N. Hawthorne, "Ethan Brand", *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne,* ed. Norman Holmes Pearson.（New York: The Modern Library, 1965）, p. 1194.

（3）レスリー・A・フィードラー，『アメリカ小説における愛と死』，佐伯彰一他訳（新潮社,1989年）p. 256.

（4）Loc. cit.,

（5）高島まり子，「ディムズデイルの精神的変貌――自我発達の元型的プロセスについて――」：『鹿児島女子短期大学紀要第26号』，鹿児島女子短期大学，1991年　pp.157-176. 以下，これを前稿と称す。

(6) エリッヒ・ノイマン,『意識の起源史』(上), 林　道義訳 (紀伊国屋書店, 1984年) pp. 223-306.参照のこと。「ウロボロス＝原両親」で表わされる無意識を「原父」と「原母」に解体し, 自我が自らを無意識から切り離す解放行為。

(7) 同上, pp. 265-7. 自我の発達史において, 自我を圧倒する否定的な殺されるべき存在である「恐ろしい男性」の内, 父権制の権威であり,「強力な古い法・古い宗教形態・古い道徳・古い社会」として登場する「恐ろしい父」元型。

(8) 同上, pp. 265-7. もともと「太母」の支配下にある男性像で, 父権制の時代に入ると「恐ろしい父」元型が投影されたもの。「破壊的, 攻撃的怪物」として登場する。

(9) 同上, pp. 223-306.「世界両親の真ん中に立った自我はこのウロボロスの両側に戦いを挑み, …この両側の敵との決戦に直面する。」即ち「竜との戦い」とは,「父殺し」と「母殺し」から成る自我の独立のための戦いである。

(10) 同上, p. 233.「英雄が夕方, 西方で夜の海－怪物に呑み込まれ, この子宮－空洞の内部でそこに現われる謂わば竜の分身と戦い, 勝利を納める。そして東の空に勝利の新しい太陽として, ＜不滅の太陽＞として再生する」という神話。ノイマンによれば,「英雄」の「竜との戦い」の元型の内でも最も広く分布しているという。

(11) 同上, pp. 251-2.

(12) 同上, p. 250.

(13) 同上, pp. 239-240.

(14) 青山義孝,『ホーソン研究――時間と空間と終末論的想像力――』(英宝社, 1991年) pp. 49-63.

(15) エリッヒ・ノイマン,『意識の起源史』(下)　林　道義訳 (紀伊国屋書店, 1984年) pp. 502-3.

(16) C.G.ユング,『分析心理学』, 小川捷之訳 (みすず書房, 1994年) pp. 182-4.

(17) D.H.ロレンス,『D.H.ロレンス――アメリカ古典文学研究』, 酒本雅之訳 (研究社, 1974年) pp. 162-3.

(18) C.G.ユング, 前掲書 p. 185.

(19) フィードラー, 前掲書 p. 257.

参　考　文　献

Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes.* New York: Oxford U. P., 1966.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter: The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* Vol. I, ed. William Chavat et al. Ohio State University Press, 1978.

Hawthorne, Nathaniel. *The Complete Novels and Selected Tales of Nathaniel Hawthorne*, ed. Norman Holmes Pearson. New York: The Modern Library, 1965.

Mcpherson, Hugo. *Hawthorne as Myth-Maker: A Study in Imagination* Canada: University of Toronto Press, 1971.

Stein, William Bysshe, *Hawthorne's Faust: A study of the Devil Archetype* Archon Books, 1968.

C.G.ユング,『分析心理学』, 小川捷之訳 (みすず書房, 1994年)

エリッヒ・ノイマン,『意識の起源史』(上) (下), 林　道義訳 (紀伊国屋書店, 1984年)

Ｄ・Ｈ・ロレンス，『Ｄ・Ｈ・ロレンス――アメリカ古典文学研究』，酒本雅之訳（研究社，1974年）
レスリー・Ａ・フィードラー，『アメリカ小説における愛と死』，佐伯彰一他訳（新潮社，1989年）
Ｒ.Ｗ.Ｂ.ルーイス，『アメリカのアダム』，斎藤　光訳（研究社，1973年）
青山義孝，『ホーソン研究――時間と空間と終末論的想像力――』（英宝社，1991年）
大井浩二，『ホーソン論』（南雲堂，1974年）
越川芳明編，『アメリカ文学のヒーロー』（成美堂，1991年）
酒本雅之，『アメリカ文学をどう読み解くか』（中教出版，1978年）
増田英夫，『ホーソーンとジェイムズ』（山口書店，1990年）
八木敏雄，『アメリカン・ゴシックの水脈』（研究社，1992年）